

2 号館周辺の植物配置図

著者	井頭 均
雑誌名	教育学論究
号	10
ページ	1-6
発行年	2018-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027470

2号館周辺の植物配置図

The Map of Tree Distribution around Building 2 at Seiwa Campus of
Kwansei Gakuin University

井 頭 均 *

Abstract

I researched types and locations of trees on Seiwa Campus. Using this information, I made maps for the year 2013. Later Building 2 was torn down and rebuilt, opening again in 2017. The plantings around Building 2 were also redone at that time. The existing trees and flowers were removed and new ones were planted.

I researched the grounds again and made a new map of the distribution of trees around Building 2 at Seiwa Campus as they existed in 2017.

キーワード：植物配置図、庭木、2号館周辺

1. はじめに

聖和大学の頃、筆者は岡村はた氏とともに聖和キャンパス内の樹木についての調査を行い、それらの結果をまとめて1998年『聖和のみどり』を出版した。その後、聖和大学と関西学院大学が合併し、講堂が山川記念館として建て替えられたり、庭木の植え替えなどが行われたため、先に作成した樹木配置図と現状にかなりの違いが生じてきた。そこで、2013年、聖和キャンパスに植栽されている樹木についての再調査を全面的に行い、新しい植物配置図を作成した。これは『関西学院大学 教育学論究』（第5号 pp.9-21）に掲載されている。

その後、それまで10号館と呼ばれていた建物が立て替えられ、2017年4月より新2号館として使用されるようになった。その際、周辺の園庭も作り変えられることになり、それまで植栽されていた庭木や草花が撤去されて新たな樹木や草花が植栽された。そこで、今回はリメイクされた2号館周辺に植栽されている樹木について再調査を行い、植物配置図を作成することにした。

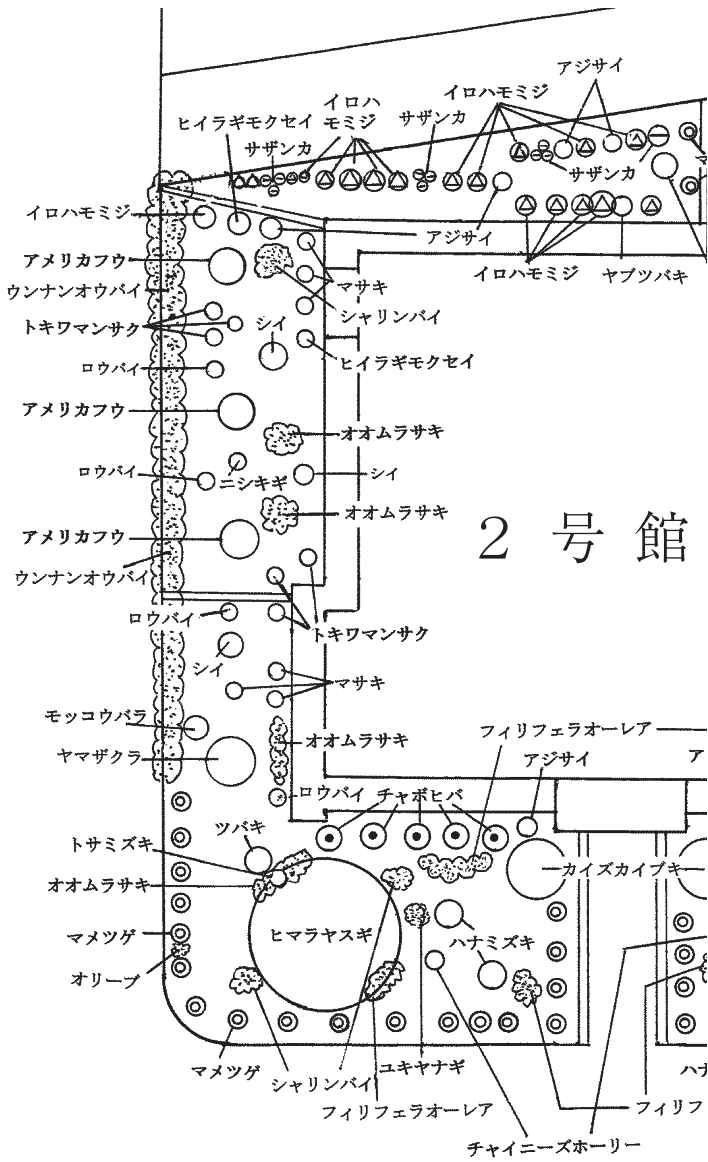
なお、本配置図の作成に当っては、宝塚緑化 K.K. の岡崎氏や聖和キャンパス事務室の方々のご協力をいただき、心から感謝の意を表す次第である。

2. 樹木配置図について

- (1) 円の大きさ：それぞれの樹木を大きささまざまな円で表したが、円の大きさはあくまでも参考程度であり、樹冠の大きさとは比例していない。
- (2) 木本系だけでなく、一部草本系が含まれている。
- (3) 前はイヌツゲとその園芸品種のマメツゲをイヌツゲという名前に統一したが、今回はマメツゲしか植栽されていなかったため、マメツゲという名前を用いた。
- (4) 細い木を3本仕立てにして植栽されている場合、3つの円で描かないで1つの円で表した箇所がある。

3. 2号館周辺の植物配置図

* Hitoshi IGASHIRA 教育学部教授



2号館 2号館

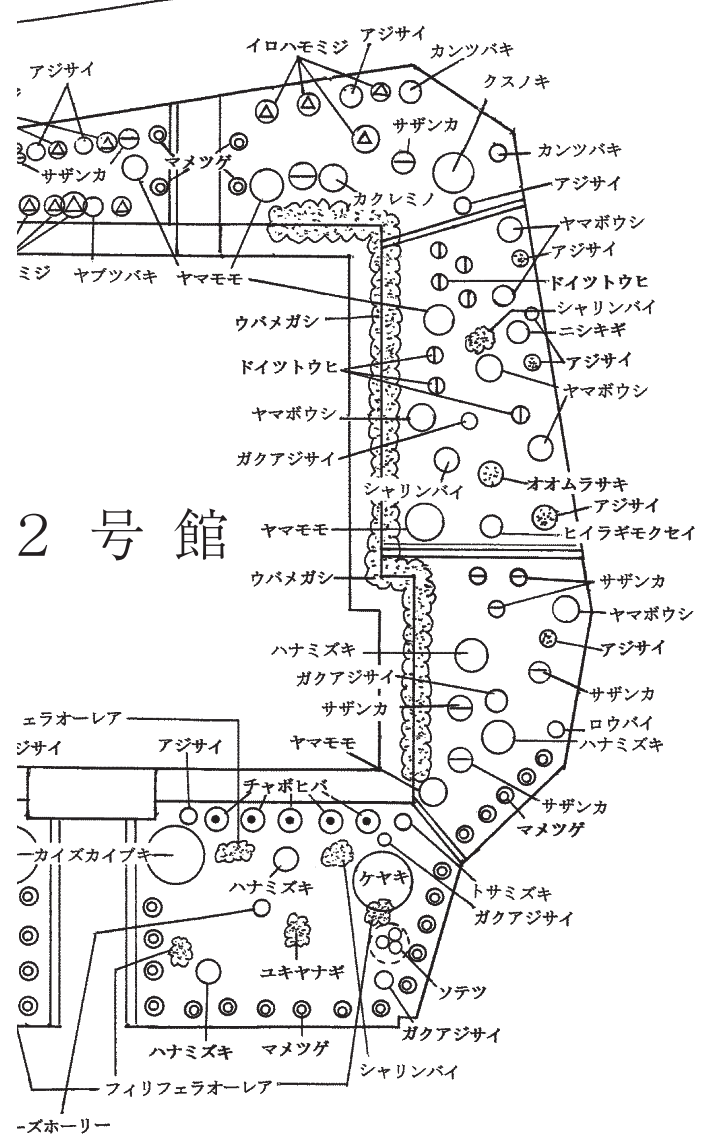


図 1. 2号館西側周辺の樹木配置図

図 2. 2号館東側周辺の樹木配置図

4. 2号館周辺に植栽されている樹木の一覧表

表1. 2号館周辺に植栽されている樹木一覧表 (アイウエオ順)

番号	植物名	科名	番号	植物名	科名
1	アジサイ	ユキノシタ科	20	ツバキ	ツバキ科
2	アメリカフウ	マンサク科	21	ドイツトウヒ	マツ科
3	イロハモミジ	カエデ科	22	トキワマンサク	マンサク科
4	ウバメガシ	ブナ科	23	トサミズキ	ミズキ科
5	ウンナンオウバイ	モクセイ科	24	ニシキギ	ニシキギ科
6	オオムラサキ	ツツジ科	25	ハナミズキ	ミズキ科
7	オリーブ	モクセイ科	26	ヒイラギモクセイ	モクセイ科
8	カイズカイブキ	ヒノキ科	27	ヒマラヤスギ	マツ科
9	ガクアジサイ	ユキノシタ科	28	フィリフェラオーレア	ヒノキ科
10	カクレミノ	ウコギ科	29	マサキ	ニシキギ科
11	カンツバキ	ツバキ科	30	マメツゲ	モチノキ科
12	クスノキ	クスノキ科	31	モッコウバラ	バラ科
13	ケヤキ	ニレ科	32	ヤブツバキ	ツバキ科
14	サザンカ	ツバキ科	33	ヤマザクラ	バラ科
15	シイ	ブナ科	34	ヤマボウシ	ミズキ科
16	シャリンバイ	バラ科	35	ヤマモモ	ヤマモモ科
17	ソテツ	ソテツ科	36	ユキヤナギ	バラ科
18	チャイニーズホーリー	モチノキ科	37	ロウバイ	ロウバイ科
19	チャボヒバ	ヒノキ科			

5. 主な樹木の解説

植栽されている樹木の代表的なものについて植物学的な観点からだけでなく、教育的あるいは教材的な観点から簡単に説明する。

(1) アジサイ

アジサイはガクアジサイの変異種といわれているが、実証はされていない。ガクアジサイは4～5枚のがく片が花びらに見える装飾花が周辺にあり、中央に小さい両性花が多数集まってつく。アジサイは装飾花が多数集まって球形となる。装飾花の中央に小さい花をつけるが、おしべ、めしべは退化し、結実しない。

花の色の変化は著しい。リトマスゴケの色素が酸性では赤く、アルカリ性になると青くなるが、アジサイの花の色の変化の要因はもう少し複雑である。一般に酸性土壌ではアルミニウムが水に溶けてアジサイに吸収されると、青色が強くなる。アルカリ性土壌ではアルミニウムが吸収されにくいので、本来の赤色となる。窒素、リンなども要因となり、それらが多いと青色が強くなる。また、ベニガクと呼ばれる品種で赤色にしかならないものもある。

(2) イロハモミジ

湿り気があり、日当たりの良い場所を好むが、日陰でもよく育つ。日本産のカエデ類の代表的なもので、庭木として広く植えられ、青葉と紅葉を鑑賞する。名前の由来は、7裂する葉先をイロハニホヘトと数えたところから、この名がついたといわれている。漢字でモミジを紅葉と書くが、昔は紅葉する樹木を総称して呼んでいたが、それらの代表的なカエデ類を指すようになったからである。

(3) カイズカイブキ

2号館入口近くの左右に植えられていて、マツカイヌマキのような枝ぶりに形が整えられているが、よく見るとカイズカイブキであることが分かる。イブキの園芸品種で、葉先が丸く、触れても痛くない。厳密にはふつうの葉はなく、枝先が葉緑体をもって仮葉となり、光合成を行っているのである。スギ、ヒノキ、アスナロなども同様で、これらのものは落葉するのではなく落枝するのである。

イブキとは刈り込んだり剪定したりしても、芽が出て生き吹きやすいところからきている。刈り込んだ箇所をよく見ると、スギ葉のように先が尖った葉(枝先)があることがあるが、これは先祖返りと呼

ばれる現象で、改良前の元の形質に戻ったと考えられている。

(4) クスノキ

葉や材にL-メントールを含み、葉を揉むと強い臭いを放つ。昔は材を乾留して樟脳を抽出し、衣類の虫除けに用いた。葉が肉厚で硬く、騒音を消す効果が大きいので学校、病院、神社仏閣などによく植ええられる。スギとともに日本では巨木となり、信仰の対象となることがある。

(5) ケヤキ

ケヤキの名は、大木になり遠くからでもよく見える顕著な木(ケヤケキ木)という意味。幹は直立し、枝が四方に斜上に伸びて杯状の樹冠となる。材が非常に硬くて強く木目が美しいことから、高級家具材、高級建築材用として用いられる。江戸時代、神社仏閣、橋などの材木用として植樹を奨励したので、今でも関東周辺に大木が多く残っている。

古くはツキ(槻)とも呼んだが、厳密にはケヤキとツキは多少異なっている。高槻の地名は、おそらく大木のケヤキがあったことに由来するのである。

(6) サザンカ

サザンカとツバキは近縁種でよく似ているが、次のような違いがある。サザンカは葉が小形(3~7cm)で、葉を透かして見ると葉脈が全体的に不透明。小枝、がく、葉に細毛があって、花びらは根元まで完全に離弁している。開花期は10~12月。

一方、ツバキは園芸品種が多く、形態も多様である。葉や花はサザンカよりも大きく、葉脈が透き通って白い。小枝、がく、葉に細毛がなく、花びらの基部の一部が合着している。開花期は10~4月で多様。

(7) ソテツ

熱帯性で、日本では九州南部、沖縄などに自生している。雄株、雌株があり、茎は太くて単立する。頂端に生じる毛はシダのその部分の毛と構造が類似して、シダ類に近縁であることが分かる。茎の周りに出た枝を株分けして増やす。

1897年、池野成一郎はソテツの精子を発見し、系統上重要な発見が日本人によってなされた。

(8) ハナミズキ

原産地はアメリカで、アメリカヤマボウシともいう。明治末期に東京市がサクラのソメイヨシノをアメリカに贈った返礼として、アメリカから30本ほど寄贈された。日比谷公園などに植樹されたが、一部が今でも残っている。5月頃、葉に先立ってまたは葉とともに開花し、白または紅色の総苞が4枚開き、花びら状に見える。総苞の中央に小さい花が20個ほど密集して付く。花びら4枚、雄しべ4本、めしべ1本。

ヤマボウシとの違いは、ハナミズキの総苞の先が裏側に丸く反っている。一方、ヤマボウシの総苞はひし形となり、先は反っていない。開花はやや遅く、6月頃である。

(9) ヒマラヤスギ

インド、ヒマラヤ地方原産の常緑針葉樹で、高さ45m、根元付近の直径3mにもなる高木。名前にスギがついているがマツ科に属し、細い針状の葉の形もマツに似ている。樹冠がきれいな円錐形となり、洋風庭園に似合う。子ども達が丈夫で大きく育つようにと願いを込め、学校などの庭木として植えられる。

現在2号館前に植栽されているのは、旧10号館時代から植栽されていたものが、場所を2号館の南西に移植された。12月には多数のイルミネーションが飾られて大きなクリスマスツリーとなり、聖和キャンパスのシンボリック的存在として親しまれている。

(10) ヤマザクラ

本州中部以南から四国、九州、朝鮮半島などに広く自生する。春、若葉と同時に淡紅白色の花が咲く。ソメイヨシノは先に開花して、その後、散り出してから若葉が出る。若葉にはアントシアニンが多量に含まれており、赤味を帯びる。赤い若葉を熱湯に入れると、緑色に変わる。枝を折ったり切ったりすると、傷口から菌が入って枯れやすいので、枝を折ったり剪定したりすることは避ける。ソメイヨシノなども同様。接ぎ木をするときは、オオシマザクラを台木として使う。

奈良県の吉野山は、古くからヤマザクラの名所として有名。古今和歌集の春の歌65首のうちの多くがサクラを題材にして詠われているが、彼らが見たサクラはおそらくヤマザクラであったと思われる。

(11) ヤマモモ

葉は全縁（切れ込みがない）であるが、若木や新しい枝先の葉には荒い鋸齒（ノコギリの歯のようなギザギザ）がある。この祖先はおそらく荒い鋸齒があったものと考えられている。このような現象はヒイラギ、モチノキ、イチヨウなどにもみられる。根には空中窒素を固定する放線菌が共生して、根粒を作る。

雌雄異株で、果実を得るには近くに両株が必要。6～7月、雌株に実が暗紅紫色に成熟して、食べられる。昔は子どものおやつとしてよく食されたが、表面にハエの幼虫が付いていることがあるので良く洗ってから食べる。徳島県の県木、高知県の県花となっている。

(12) マツバウンラン

4月から5月にかけて2号館南側の芝生の中に背丈30cm程度の雑草が多数、青くて小さい花を咲かせる。アメリカ原産の帰化植物で、オオバコ科の1年草または2年草。葉の形が松葉、花の形がウンランに似ているところから、この名が付いた。雑草ではあるが、風に吹かれて咲く可憐な姿に心惹かれるものがある。

6. おわりに

今回は2号館周辺の樹木について調べたが、それ以外の聖和キャンパス内の樹木について関心がある人は、2013年発行の論究 第5号に掲載されているので、それを参照していただきたい。

2号館が建て替えられる前の植樹に比べると、園庭が広くなり樹木の種類も増えて多様になっている。また、洋風の建物にマッチした園庭となり、見通しが良くなったように感じられる。しかし、教育的な面からみると、教材としてどのように扱えばいいのか難しいものが多く、教材的な魅力がやや減ったような気がする。フィリフェラオーレア、ウンナンオウバイ、チャイニーズホーリーなどは、名前を言うだけでも一苦勞である。

動物でも植物でも、一般的に外来種を持ち込んだ場合、適し過ぎて在来種を激減あるいは絶滅の危険にさらすことになってしまうことがある。植物ではセイタカアワダチソウ、ブタクサ、セイヨウタンポポ、古くはモウソウチクなどが挙げられる。動物では日本の各地の湖や川で大量に増えたウシガエ

ル、アメリカザリガニ、最近ではブラックバス、ブルーギルなどがそれまでの在来種を追いやり、それまでの生態系に大きな影響を与えて問題となっている。

反対に日本の環境や土壌に適應するのが難しく、飼育・栽培に多くの労力を必要とするものが少ない。本学のキャンパス内で外国から入ってきた植物のなかで管理に苦勞されているものをあげると、まずはアメリカヤシである。上ヶ原の正門から眺めると甲山を背景にして、時計台の前に広がる芝生とその周辺に並ぶヤシの木が非常に美しい。しかし、もう少し詳細にアメリカヤシを眺めると、大木に育ったアメリカヤシもあるが、それほど大きくないもの、細くて小さいものが多数含まれている。これは恐らく、大木が台風になぎ倒されてしまったので、新しい若木を植え替えたものと考えられる。

今から40年ほど前は、このヤシのことをアメリカヤシとは言わずに、琉球から入ってきたのでリュウキュウヤシと呼んでいたと記憶している。沖縄が日本に帰ってきた頃からだだったと思うが、アメリカヤシと呼ぶのが一般的になってきた。それはとにかく、台風の多い日本では育てるのが大変で、何年もかかってやっと大木になったと思ったら、一晩で倒されてしまうのである。

また広々と広がる芝生地であるが、シバはもともと雨が比較的少ない地域で育つ単子葉類のイネ科植物である。聖和キャンパスにも山川記念館の南側にも芝生があるが、日本のような湿潤温暖な気候下ではオオバコ、ツメクサ、スイバなどの双子葉類が侵入してはびこり、それらはやがてシバを駆逐して、日本の気候に適した本来の雑草地になってしまう。そこで、美しい芝生を維持するためには、双子葉類には効果があるがイネ科植物には無害の除草剤を定期的に散布して雑草の侵入を防ぐか、除草剤をあまり使いたくない場合は手作業で雑草を取り除くことが必要となる。雑草を1本1本根こそぎ取り除く作業は、大変な労力である。

その他、美しいキャンパスを維持するためには害虫駆除の薬剤散布、植木の剪定、肥料や水の散布など、多くの人々の働きによって管理運営がなされていることを覚えておいていただきたいと願う次第である。

参考文献

- ・井頭均 2013 聖和キャンパスの樹木配置図の作成『関西学院大学 教育学論究』第5号 pp.9-21。
- ・岡村はた、井頭均 1987『身近な植物』聖和大学生物学研究室
- ・岡村はた、井頭均他 1998『聖和のみどり』聖和大学自然研究室。
- ・牧野富太郎 1982 原色牧野植物大図鑑 北隆館。
- ・岡崎氏 2017「2号館建設工事に伴う植栽竣工図」ガーデンラボ。